



豊けき耕土

校訓

誇り
夢
前進

常に正しきを求めて 向上的態度を持とう (古川学人 こせんがくじん 吉野作造博士 こせんよせい 古川餘影より)

大崎市立古川中学校 〒989-6152 大崎市古川二ノ構7番54号 TEL 0229-22-0236

ホームページ <http://www2.educ.osaki.miyagi.jp/furukawa-c/index.html>



感動の卒業式

3月9日(金)に第77回卒業式を行い、卒業生194名が学び舎を巣立っていきました。当日、卒業生は堂々とした態度、晴れ晴れとした表情で式に臨んでいました。「送辞」では、在校生を代表して2年の M・A さんが、お世話になった先輩方への感謝の気持ちと、これから古中を引っ張っていく決意を伝えていました。「答辞」では、卒業生代表の S・S さんが、部活動などでの思い出を振り返りながら、この3年間で自分たちが成長できたこと、そしてこれまで自分たちを支えてくれた後輩たちや家族、そして母校に対して、感謝の気持ちを心を込めて伝えていました。式後には、卒業記念合唱がありました。ステージで、精一杯歌う卒業生の姿にとっても感動しました。今年度から在校生(2年生)も参列いたしました。2年生の皆さんも、卒業生の晴れ舞台にしっかりとした態度で臨み、式を支えてくれました。卒業生の姿を見て、1年後の自分たちの姿を重ねていたことと思います。卒業生のみなさんの新天地での更なる活躍を期待しています。



教職員、在校生一同、これからもずっと応援しています。

卒業式 式辞

昨日から、3年生との別れを惜しむかのように、名残の雪が降っています。しかし、春はすぐそこまで迫っており、船形山や栗駒山を包む光が柔らかく輝き、そして世界農業遺産である大崎耕土を潤す水が豊かに巡り始める季節となりました。

この佳き日に、大崎市総務部長 赤間幸人様、本校父母教師会会長 熊澤直嗣様をはじめ、多くの御来賓の皆様と保護者・家族の皆様に御臨席を賜り、77回目となる卒業式を挙行できますこと、心より厚く御礼申し上げます。

3年生の皆さん、卒業おめでとう。

ただ今、一人一人に卒業証書を手渡しました。その晴れやかな表情には、9年間に渡る義務教育で多くのことを学び成長することができた自信と誇りを感じ取ることができました。

さて、現在はアフターコロナとも言われていますが、昨年のゴールデンウィーク明けから、新型コロナウイルス感染症が普通のインフルエンザと同じ扱いとなり、それまで様々制限されてきたことが通常どおり行えるようになりました。全校による夏の体育祭が澄んだ青空の下で、正に当時の生徒会スローガン「輝き・シャイン」そのままに、躍動する姿とたくさんの笑顔が見られました。その他の行事の中でも特に心に残っているのは、4年ぶりに開催できた合唱発表会です。3年生にとっては初めてで最後の発表会でした。最初は手探りから始めた取組でも、仲間と協力し合い、歌う喜びと表現する楽しさを感じながら合唱を創り上げ、本番では最高の発表ができたといった感想が多く寄せられたことは、私にとっても大きな喜びでした。

部活動においても、活動場所に響き渡る掛け声とはつらつとした態度で練習に臨み、本番では、団体競技、個人競技ともに持てる力を存分に発揮して、市の大会はもとより、県、東北、そして全国大会まで進む選手たちの活躍に、全校が古中生としての誇りと自信を感じ取ったことと思います。吹奏楽部や弦楽部も同様に、音楽コンクール出場に向け、部員の心を一つにすばらしいハーモニーを奏でることができました。また、文化ウィークでは美術部、家庭部の個性あふれる作品が展示されたり、囲碁将棋部では各種大会で上位入賞する生徒も出てきたりするなど、活動を充実させることができました。(次頁へ)



その他にもクラブチーム部の活躍など、たくさんの活躍が見られましたが、その中心には常に3年生の姿があり、1,2年生の目標でもありました。今年で開校77年となる本校の長い伝統と歴史を受け継ぎ、現在の古川中学校を作り上げ、今ここに、そしてその役目を終え、立派に母校を巣立とうとしている皆さんに一つの詩を紹介したいと思います。

十里の旅の第一歩
百里の旅の第一歩
同じ一歩でも覚悟がちがう
三笠山に登る第一歩
富士山に登る第一歩
同じ一歩でも覚悟がちがう
どこまで行くつもりか
どこまで登るつもりか
目標が
その日その日を支配する



この詩のタイトルは「第一歩」といい、大正から昭和にかけて活躍した社会教育家の後藤静香（せいこう）という方が作ったものです。

十里とはおよそ39キロメートル、百里は390キロメートル、ここから歩いて仙台に向かうのと、東京まで行くのとでは、始めの一歩の重みが全然違ってきます。三笠山342メートル、富士山3776メートル、同じ登るにしても、富士山に登るにはそれなりの準備と覚悟が必要です。同じ一歩を踏み出すにしても、行き先すなわち目標次第で覚悟が変わり、その覚悟をより確かなものにするために、その日その日の過ごし方が全く変わってくると思います。

3年生の皆さんは、4月からこれまでの生活とは違った場所に活躍の場を移します。さて、皆さんはそれぞれの場所、置かれた状況で、何を目標に、何を目指しますか。どこまで登りますか。

どうか皆さん、それぞれの目標に向かって、覚悟を持った一歩を踏み出してほしい。途中、立ち止まったり、遠回りしたりすることもあるかもしれない。しかし、見つめる先を常に高くして、その歩みを続けてほしいと思います。

在校生にお話しします。3年生の門出を、このように一緒に祝ってくれて本当に有り難う。皆さんの良き先輩として導いてくれた3年生が今、正に古中から巣立とうとしています。3年生から引き継いだバトンをしっかりと携え、“オーバー・ザ・トップ”何事にも恐れず、挑戦し、乗り越えていってほしいと思います。

保護者の皆様に申し上げます。お子様の御卒業、誠におめでとうございます。

今、心身共にたくましく成長して本校を立派に卒業しようとするお子様の姿に、感慨もひとしおのことと存じます。どうかこれからもお子様の成長を温かく見守っていただき、時には人生の先輩としてアドバイスなどしていただきますようお願い申し上げます。

御来賓の皆様、本日に至るまで様々な場面で生徒たちの活動を見守り、たくさんのお励ましのお言葉をいただきました。お陰様で、本日無事3年生を送り出すことができます。今後とも卒業生に対しまして、大崎市の未来、日本の未来を担う立派な人材に成長できるよう、御指導・御鞭撻のほどをよろしくお願い申し上げます。

結びに、本日学び舎を巣立つ卒業生の輝ける前途を祝し、そして本日御出席いただきました皆様のますますの御発展を祈念いたしまして、式辞といたします。

令和6年3月9日 大崎市立古川中学校 校長 佐々木 晃

(次頁に答辞を掲載しています)

答 辞

遠くの山並みの雪解けとともに、希望を乗せた暖かな風がそよぎ、桜のつぼみが膨らみ始めてきました。

本日は、大崎市総務部長赤間幸人様を始め、多くの御来賓の皆様の御臨席を賜り、私たち卒業生194名、心から感謝申し上げます。こうして卒業証書を手にし、もう戻ることのない中学校3年間の思い出が、次々と浮かんできます。

3年前、今いるこの場所で入学式が行われました。担任の先生の名前を呼ぶ声に、緊張しながら返事をしたことが思い出されます。小学生気分の抜けない私たちでしたが、中学校生活は否応なしにスタートしました。慣れない勉強と部活動との両立に、何度頭を抱えたことでしょうか。部活動を頑張れば頑張るほど体力は続かず、宿題や課題の提出がおろそかになったこともありました。初めて経験する定期テストにどんな対策を取ればよいのか悩み、結果を見て焦ったこともありました。こうして初めてづくしの行事を一つずつ終える頃には1年が過ぎていました。



2年生は、「先輩」と「後輩」の間に立つ微妙な位置。後輩ができると、今までのように全てを先輩に頼ることができません。戸惑いつつも自分たちのやるべきことを考え、行動しなければなりません。中総体で活躍した先輩方を憧れの目で見ていたように、自分たちもそんな目で後輩に見られたい、そんな思いにもかられました。そして、9月の新人戦に向けて練習に励んだのです。前日の壮行式では各部が決意を述べる中、我々全員が優勝を目指していることを知り、心が一つになっていることを実感しました。

そして3年生になった今年度。進級して間もなく行われた3日間の修学旅行は、今でも色濃く思い出されます。夢の国で過ごした友達との時間。計画通りにいかない自主研修は時間との闘い。宿泊先での他愛ない話で盛り上がったあの瞬間。どの場面もまざまざとよみがえってきます。

中学最後の体育祭では「一致団結」を合い言葉に優勝を目指し競い合いました。作戦会議をして臨んだ綱引き。転倒しても立ち上がり懸命にバトンをつないだ全員リレー。勝敗がつくたびに校庭にどよめきが起こり、気持ちは一層高ぶりました。コロナによる行動の規制が緩和された今年。中学校3年の中で初めて最後となった合唱発表会は、仲間と一つものを創り上げる喜びを教えてくださいました。授業はもちろんのこと、放課後の練習にみんな一生懸命に取り組みました。後輩たちに先輩としての姿を示したい、すばらしいハーモニーを届けたい、そんな気持ちで臨んだ発表会は、どのクラスもすばらしい歌声を披露することができました。

こうして振り返ると、思い出に彩られた3年間だったと思います。その中で、悩んだり傷ついたりを繰り返し、私たちは少しずつ成長してきました。そして、部活動は私を最も成長させてくれました。

私が所属するテニス部は、中総体で個人戦、団体戦ともに敗れました。試合は、どれだけ頑張ろうと勝つか負けるか、必ず勝敗がつきます。敗れた後、「あとちょっとだったのに。」と唇をかみ締めました。「全力を出し切ったのだから」と自分を慰めてはみたものの「なんであの球を打てなかったのか。」という悔いも残りました。でも、結果は覆りません。負けは負けなのです。後悔と悔しさがいつまでも心にくすぶり続けました。そんなとき、負けたからこそ学べたこともたくさんあることに気付いたのです。その学びをこれからどう生かしていくのか、それが大事なのではないかと、いま自分ができるとは後悔ではなく、前を向くことなのだと思ったのです。

行事が一つ一つ終わっていくたびに、少しずつ教室の風景が変わっていきました。休み時間、あちらこちらで笑い声が起きています。参考書や問題集に向かう姿もポツポツ見られるようになりました。真剣に進路を考えなければならない時期が来たのです。小学校からの9年間、隣に目を向ければいつもの見慣れた友達の笑顔がありました。当たり前のように毎日を過ごし、一緒に遊び一緒に勉強し、お互いに切磋琢磨し合った友達。でも、もう自分の目標に向かってそれぞれに歩みを進めていかなければならないのです。寂しさはありますがいつまでも感傷に浸ってはいられないのです。



いろんなことがあったこの校舎ともお別れです。初めて校門をくぐった先に見えたひびの入った校舎。雨のときは天井からの雨漏りに備えてバケツが用意された教室。この校舎には私たちの思い出がたくさん詰まっています。部活動の練習をさぼったことも、友達との間に起きたいざこざに涙したことも、短い休み時間に友達と大笑いしたこと、みんなこの校舎は見守ってくれていました。そして、心身共に成長した姿もまた見ていることでしょうか。

在校生のみなさん。私たちは決してお手本になるような先輩ではなかったと思います。こんな私たちを支え、ついてきてくれてありがとう。これからも様々な場面で活躍し、古川中学校を盛り上げてくれることを期待します。

先生。私たちの軽率な行動からいつも御迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした。この3年間に受けたたくさんの御指導、忘れません。そして、お父さん、お母さん、家族のみなさん。15年間私たちを支えてくれてありがとうございました。いつも側に寄り添い、時には私たちが間違った道に進まぬように導いてくれましたね。家族の支えがなければ、今日この日を迎えることはできなかったでしょう。本当にありがとうございました。

そろそろお別れの時が近づいてきました。これから先どんな困難が待ち受けていても仲間を信じ、その先の希望へ突き進んでいきます。名残は尽きませんが、校長先生を始め教職員のみなさま、御来賓のみなさまの御健康と御活躍をお祈りするとともに、古川中学校のますますの発展を期待して答辞といたします。